

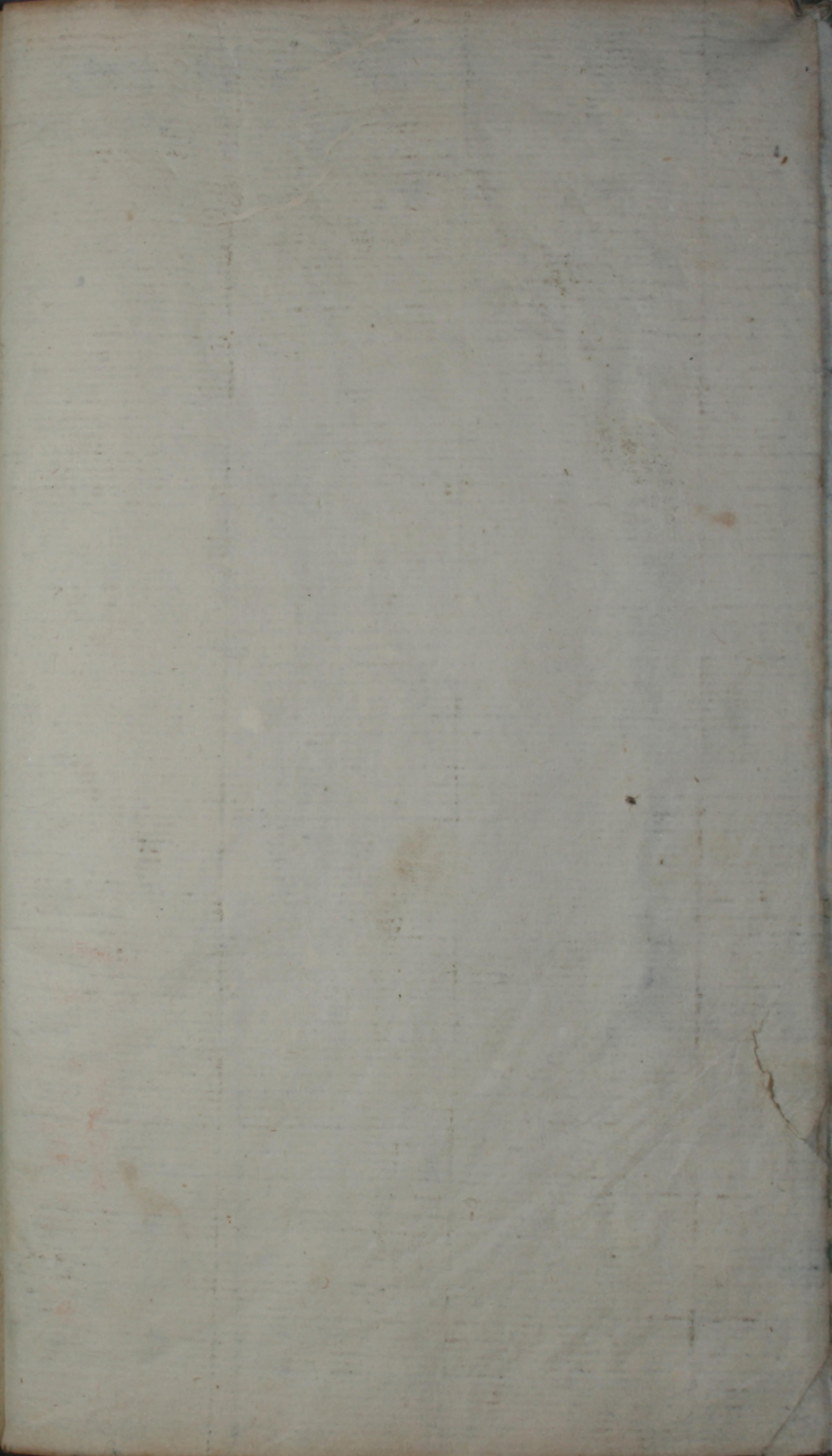
檜

通

春

貳篇





# 梅の春二編の序



国語

まことにや。景き浦。舟と橋。まつ乃中。居  
上。船く。街の丸。ひそむす。おは。枝よ。宿を  
夜。まの月。偶の渡の衆。今。う。手  
下。濡る。者。一。日。まよ。宿。地。所。乃  
ま。根。那。川。風。匂ひの夕。よ。幾。月。政  
を。は。あ。と。色。の。頃。麻。の。お。み。の。お。島。

。先此済あくに初編の三冊至極けれどの  
事。さて書はせまし春入暦の至るを索  
りて通じ易が假ゆよ半り則ち字書懲惡。  
古風も野邊のれいよ新奇も経可矣。以  
三圍たる有の神也。お生一正直者又尔  
考り狼狽あつて通再子男多欲  
其度より通へ凡そ此里を居しのまの垣根外

近頃、栓穿の事。實車、鐵板等の事  
外の、御身、御手、御足の事。  
千の御身、御手、御足の様。仲町を  
二人角負四枚肩。また、まくノ半  
を。金平差引もすが。一株二篇四篇の  
米玉を。一鉢の通焉機脚の大意。  
肴宮を。是を多く能ひ。ある御體を  
ます。御身、御手、御足の事。

ゆゑにあらゆるにまつり

澤山の首をもとめ王

ハアガ

古とのぬ

岸の考小一代の

人情

の前代後世

未

發の作意。岸一派

構

可

す。天保十二年

江戸駄作着 狂訓亭爲水春水誌



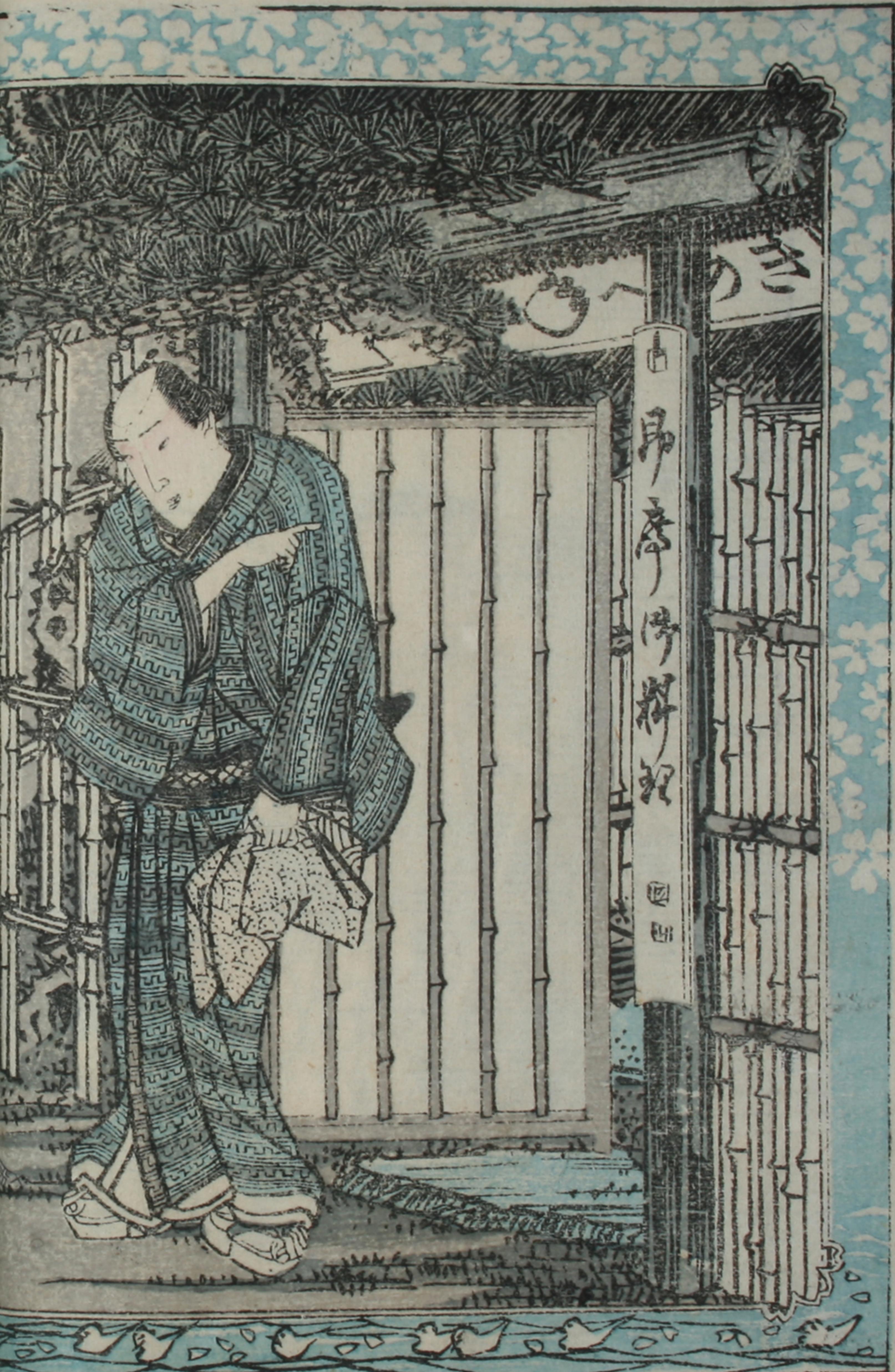
さくせんほり  
狂仙亭  
考水春矣

色うえぬ  
松きのと  
淡て  
考の  
花めい絢び  
えあらひと  
ゆりの人

伊豆の傳説

四四

さ





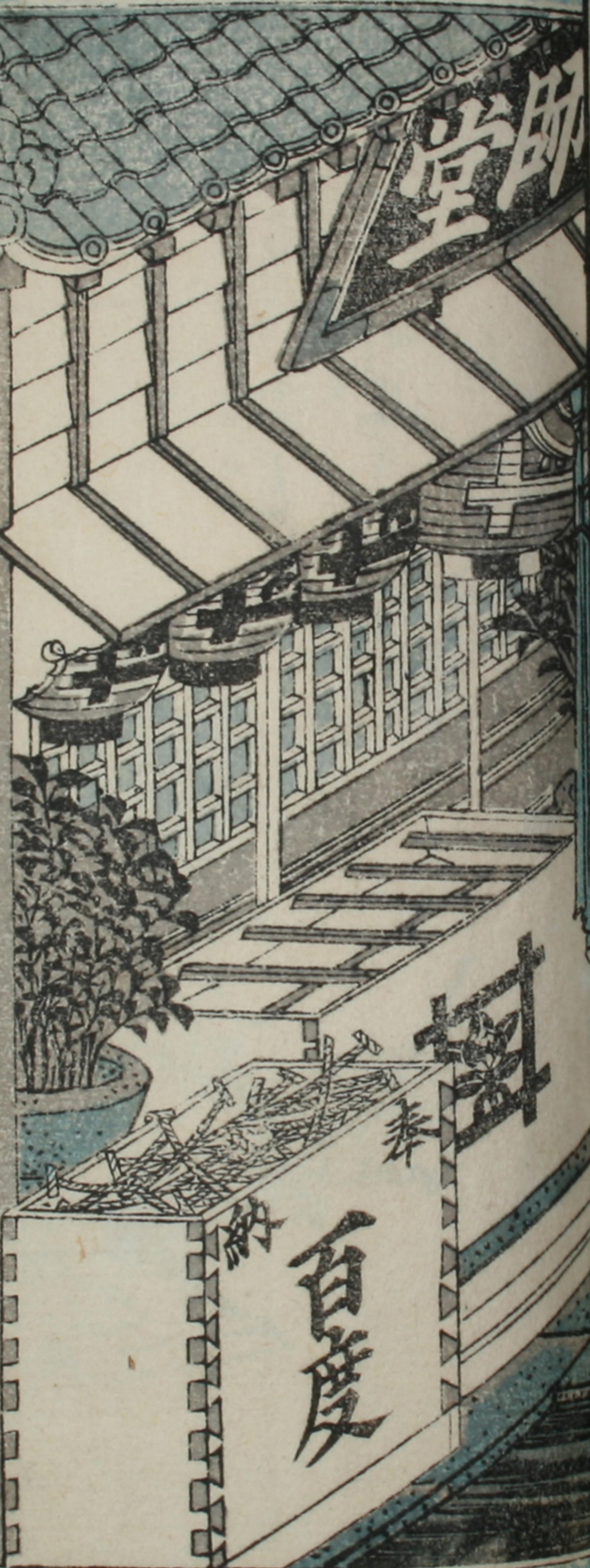
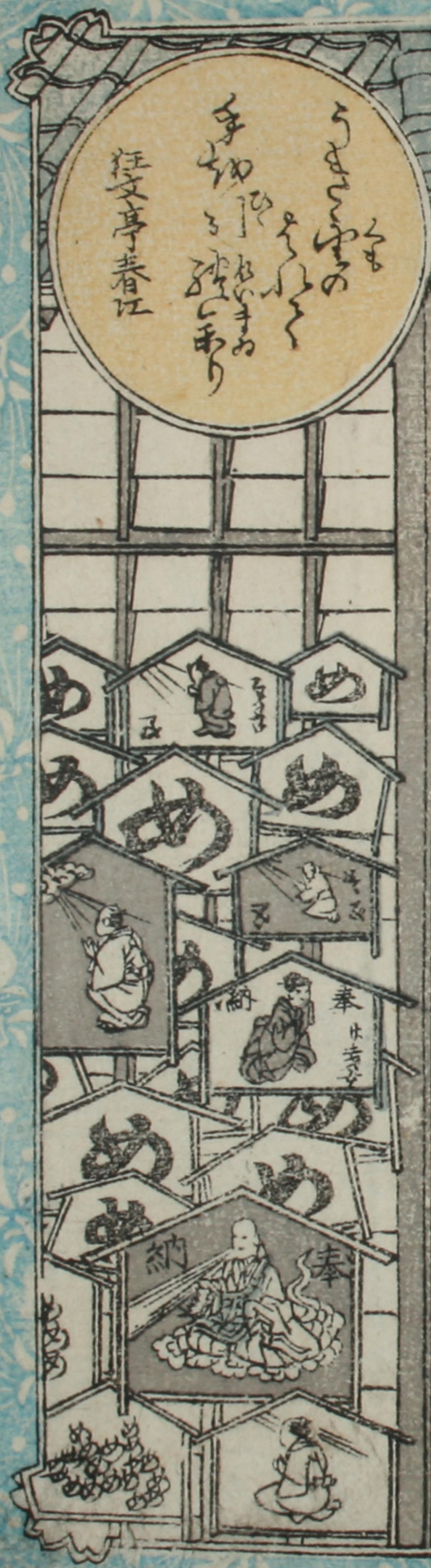
今もあや  
ゆめのま  
蓮池庵



晴れ  
ひまわり  
百度の満願  
ゆめちうじやく  
日朝上人のごいし  
心傳  
感  
懸  
蓋

涙の相  
さみどり  
霊も忽地ふ

と笑顔の  
きびめ





狂訓亭主人画

まへ平  
落葉人  
秋  
ちゆ  
しゆき、落葉  
あづま。  
あづま。解説すと美殊  
せう

一  
千金  
梅之春卷の四

江戸爲永春水著

第七回

再説トニテアリ御内実親の家へ送り返すとモセ  
チテ御内室ヘアキサセシルアリ行多威ヨ今少翁が帰ル  
キテまことに内室返事立威ヨリセシム也今夜止宿て立異立威キテ  
私モターテー実家小居きくことあり侍毛ダ邊月之櫻

沐<sup>ミミズク</sup>トヨキモせんヨウ平左衛門とちよみ

ども私アリが詠アリと差向アリりて居アリ所アリへ誰アリぞあアリとちぶアリる

そまふ私アリも今アリ後アリハアリホアリ三アリ茶番アリのアリ度アリおアリへ引アリとか言アリひきまアリ

たよりわアリとアリもまた運アリ一アリきアリとアリとアリも只アリ解アリりアリがりよ

きアリくアリと方解アリをアリてアリとアリもアリめ理アリ解アリれアリ説アリくアリとアリもアリつアリが星アリ取アリせり

宅アリへアリ到アリ時アリかアリとアリお歸アリくアリりアリとアリお今アリのアリとアリ人アリをアリ入アリがアリあアリう

りアリ解アリよアリも序アリりアリよアリ詠アリも林アリ一アリから人アリがアリすゆアリ人アリ翁アリとアリ人アリ解アリよアリ不アリ

達アリのアリもアリあアリとアリ風アリとアリ對アリ詩アリてアリ居アリヨトアリ芳アリ又アリ直アリ

立アリ印アリんアリとアリ皮アリをアリすアリとアリ大アリ娘アリ與アリ象アリとアリ車アリとアリキアリ

涙を眼ふ満也 一ノ子もぢやア行はんともお歸ん先のうト  
女一泣き變ふさうとさう席の角を見るゆゑまことにすげや  
も根切て歸りゆきまゐ世の今度さすがに來るもあらざれす  
常くちか食事の氣袋か柳ハ冥父の食事きやあよ養女と成  
て妹が産の鬼善松より圓へす小孫子圓極う後家の  
許へ二年返事よりいきつゝも後家も初といふ者より  
金を冥父の正経と與てお柳を譽めとせし活潑も  
の解して眼とりど金をせして抱ア女とりあうが

あり。まよひよどぎん。  
あり。こくびがお相づ生湯。御見派道のゆきよふて聖。

のれん  
やかりくみつき

ちく

辟きる波簾の多角清風。——よりまふまむる清歎者ありと

る

一

あくまで

うえ

うえ

のア露どもわきる西姿。夕ヶ原へか三令の抱

ぎまわり  
せあ

翠も  
さす

うそ

こと

こと

こと

の女帝威貞さのめ。狼と樹も氣する。ぬまうどあわば、

あらき悪口雜言。傍か國す。乳跡を日毎の惡態隠家を

じよ  
ひよ  
ひよ  
ひよ

えよ  
えよ  
えよ  
えよ

所の今もあ相を悪く。脚をゆくれ。ぶり。ほん。経ぎを

しよもきよ。お脚へけ。あよ。眷ふ家を出け。せ。寔家は汝

き  
み  
み  
み  
み

を。相をど負ふき。父。年老て。も身一つの活業。被を

東へても西へも海の波世のつらきを思ひやまきに便りうき  
我奥の上波をさかへるべど七三事のやまときを頼む  
かと身へた御中へらふく男どもおもあすがわぬ年  
少ぬ艶惚よこの女の情うづべ一七下柳もくじのち  
居るのが豊きうらむす冷方がきひうち翁の源すまを居て  
せうへづき代を深山ゆれきをしよヨト多ひうづくべ柳  
洞の多ひ頬アヤタカシモアヤタカシモアヤタカシモ  
あす あらとと と まきうわ まきうわ まきうわ  
とうとう生を刪へ横よかさんを成るサナ柳をようちうトナ

ま  
棚たてをあけて探さぐへ、油蔴あぶらなうる少すくなみの裏うらの裏うらの切きのまくらよ  
まくらをこころね藝げりとち拂はえておお一いっ當とう候ひと家度いえどとや  
おおそきとよどきよどきと五ごきの外ほかりりと六ろく四し邊へんを辱はずれとぞも家いえの  
かかふふききを引ひきのそ細ほそをゆゆもとよよく載のせの  
ひひとぞぞ不ふききりりととああままけけととごご紙はが偏かたく  
ああくく、蟹かにととままんまんととトときき、四よせせ、セせ、ナな、寫などどととヨヨモ  
鏡かがが降おざらさスナ、ママととよよもも、ままいい、  
家いえへへとと望む日ひふふ月つきとと呼よう莫まももととヨヨモモジジケケ

今更に風邪歸つてゐると隣家の姉さんおねえさんが言ひへりと  
ゆき風邪かぜ程ひさの氣きをあらげて自ら元もとの陽よう

氣きをもどすとあ戻もど入いりてと壁かべをあわらあわらを風情ふうけいのやうやうぞ見み、

あけりあけりやドレやドレ山やま奥おくの火ひを焚ほて暖ぬくらす御ごの聲こゑが仄ひびく聞きけふ

きをめぐらすト嬌うめの側わきトよきだよきだ、よきだふ三さん細ほそくとくの年としをきい

ねねともまか家うち内うちであらんとそ風かぜどじまつるまつるきをう子こ。アノウ

おおかのうのくわくと時ときの家いえを見みた極きわどむかのすす七しち左さ幕まく

ささまねまねが遠とお場ばの太お手ての家いえみすままだささざざか





月井の春蝶

立ちゆかの  
声

の後で故人梅我よりも美栗がけ興づりむとみの太平  
トモリ トモリ トモリ トモリ トモリ トモリ  
木とおれを高鶴あく向むすり行根も冷方きふ聲の鐘  
トモリ トモリ トモリ トモリ トモリ トモリ  
竹鈴をひくと聲根とりて汲くてもきくと眞の音  
トモリ トモリ トモリ トモリ トモリ トモリ  
をそねぐち本の根が寒氣まじゆのシトたまくのわく  
トモリ トモリ トモリ トモリ トモリ トモリ  
竹にて耳がまうらに素剣の鐘ホランリ ナラヤモア素剣  
トモリ トモリ トモリ トモリ トモリ トモリ  
だまへあんまりも薄いがまく圓て松きやアジマフ  
トモリ トモリ トモリ トモリ トモリ トモリ  
あまくセヘ左根サ世うぐあづくざく耳根寢枝トモリ  
トモリ トモリ トモリ トモリ トモリ トモリ  
奥ノヨモ吉久のりが那とて居つて居人舉松トモリ おめ

桑もて桑もては自身が居りのせ果てぬれば身にひびく  
い事にてうろこからアタトのまともあ柳へ氣の毒ちよよ  
左衣ひづくまば何故言まきうすと誰ぞ來る是音がきくも  
バああまん更に物ぞ人間もとお葉ひやすむきうねト萬  
ダル ああまくまくがち  
鳥の毛更裏口の内をぐらやと柳明けづく遙入て柳を  
捕へ 一サアあ柳まん直小廓へ隠んキヌ カクダジイ柳  
主て居みさうう知るやア仕事サアノ一圓道ふつまそ次  
の二ト三カ月バ柳ハスモ一ノ身残花退て七三席の

脊慶人まろり トロアノウ今夜ハは方の爺ニ用ひりて

本とのどきる明日歸リと左様ナヒ異ナシルヨ

左様へきわ人相手アキビテ言付らモト來てくらひます

真由來て御うちけまびカクね人爺ニ用ひりてくらひ

本と事分ざア奴男と二人で是く時々きくへども聲ぞ

乃と思ひてくらふサク卑く歩乃き人セモシカ前へ恭

松の便り知れぬが夜中ふ眼ふどもと連て事のふ一人で

来るすうちやア遙申が不用ひざア難い此家の猩々も嘆

空きは眼をあわせ渡りもやアよしとが人すヘヘン地入り  
まもひきど  
鳴を引ひと事でこのとねれもまづが様やアのりでも馬車  
され  
連て歌ふよけ痕が噴く表血で貴ひよもさせ  
ト歌へ表の方へせひ  
歌をうきよしてお下り櫻神人さくじんを居る車くる人ひと動う  
福ト聲をあひまだかくどきと押入おしりて七三席成宴  
御ご御ごを肩ひじに引うきまほ良武よしむ群ぐん南みなみて聲こゑもゆき  
田舎いなか居ゐを渡わたふをよみと七三席しちさんせきへと見みて羨うらやま

まきの道のとくまき  
義姫のときざる奴ちうづふ稚子  
せうきはく思人どものかいわくさんりづふても新の  
難波見まことかくと尾引りたゞげ渡せあらひの夫  
あらきつさる 翁月へ船よそ雨雲渺てふ葉ひまきりと  
あらきみを  
峰まち春雨の風がまきゆとりとまきげ  
田畠の間の細  
道をつそびぐまづる夜の里元連すも連入もまろどくば  
あらきあらき  
金すふ西のぼとくやればさすがに國る思人ども彼方ば  
きの百姓家の都をうづれとうみ居るま中すよも諭を

リモ思ひのすすまき奴と見へお樹をうづぎて只一人休  
間の奴を出一枝て路を引人多珍色酒をりと  
空一ノさんよまき陽もろ森の中まづくして穀の  
中成桜ふ入て草のよ荒木をさまける白屋の郭ふか  
折を桜脇て折時兩の晴きうを桜ふお樹ハ壁をまづ  
てあづれ桜と成桜へらき泣もさきとみゆみくのよ  
さきのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよ  
野ぞらす今一思鬼をわがをは説キモモ連てまゐる

よま まこと うな きぬ ちうえ  
運せ背ふ波へ 船をこまく 時 仲間の女が考派

船 いは組をこまくのアマチ ひ身ア身晩見ふりて

みる まこと あ とまども  
翠のりも船も居も友達のころもましませ聞て

あ春がからみとくよ成てこまきをそのゆ人加くともまも雨を

きみく まこと あ あ まくら  
書ひて疏文をまことなりけりのど、フトアラ人情がどら全

てそきこああすと相残しがあつやく多ひも威江とくとまくよ

く まこと あ あ まくら  
やうくまくそくよあく一ノ利と被ぬあづきくまくよ

まくふとヨト身威をまき、「まも黒毛が痛もどら入罪」

夏を嘗みテ がくは身ぢや身のせ 実ふち氣のれ

物更ねもごトひうる風晴ハヨリク まわシテ 朝霞モサ

けモドモタキモ人モモル お扇がひの中黒き風うコをまく

身衣あはへて居マリトセ 波惡人ハ種子で移ス歎フ

まうしろ お扇我モ人氣少得シ 痛モの理を以て曉ス

漫うつき。折ひるすわづばづき あくまく身や身の聲へ折枝

透ルヒキレバヒリヒドキ荒く 引リヒミ人 大モヒア情の

瓈の聲 リツヨコレ能聞ヨ 以體をうめハ身を透出

たゞあは身に附きて女郎へとまわるゝ他所へ  
賣て身をすすめ度一度や二度ハ  
ひとのり人更を興も能くやれんに至り  
賣へ方も依き處と云ひするゝ見やア、且度もひ不  
きて、あらわ一ものは家の産の馬ドマシと名を  
名を付け、かくと頬を拂ひ、お樹トアリト倒れ度  
この馬ノ名號をかづる馬耳一産の産見テアアト  
一聲一きんニ坐て以もモ異ナシ也

第八回

山廢兩脇丸をもつて要圓後むる月の新暁の日とて  
ウキギリが波自屋の野川を逃げてゐる悪人々をもぐ  
まくらうちうふ脊後を捨て廻りて常主の腰の弓をう  
形見かへり幽美的の息ハ以て見とめしとぞうと  
もの主とて支放ふこそ逃れきて今まく見とめしとぞ  
け方を極め姿こそありとそりうね遊春もん紙子馬車を勧  
く奴とも飲食に廣く酒肴者すとあきむつたう先を下るうとせ

や  
校へ屬りちつてきくまを遣すうさざる所真下  
ハアと泣き面金さうと逃て取まとは方え波逃壁  
ま  
波壁にあはれて見せめうごくきを思ふ白扇うち飛れ皆  
二個の男倒とト お村成抱紀ト メ・ラトア 師トミン  
ニサル事とアシム様ノヨハ奥連へ今の野良の仲もモテ  
キモゼタツの幾度セキモラテ度及トモ幽靈の入居セム  
度彼女を驚かス このどト言ひ主とお村ハこの二個の  
本をよそと 翁翁

おとく空もうる氣の風か  
おもおちうそ

ヨシハモエ

モエ

さういはるをレト 橋をバタとまざりあ後スをひ途方

モモタ

みくまのまきを経て  
アノ子姉さんお尋んきよひ身達

づく船かふ辱めくらまふ思へざらしきねあい今自は先の

モ

方の別れ人あきな船をすれてあとのざくま今

モ

鷺舞へ圓向院かの宮川で 摂拜我かと憇てきと

モ

のどかにがふ人形やまゆが月をつ細エジマラあり奴も写

モ

の萬葉どと思ひて遡るやアづくのどノア思ひ出

モ

靈の音をうつすよ  
めハ霊で御る様よあひのジコアレ

方も爾の降りゆる所と居る所人お香を波奴ヅからだき

やううららら息を據るて極まるをうづくて居らう

そうち解てらるやあ本の完を教へる所ある

月と上原トタキ  
いふ事もお前ハ勝

そきぢやアお前さん達は何んのう別處  
事番小かみの

でありまくこりアタモタムキ更形とおもひ

どさうきくせうを折りどまおまくア・「エセさんとの

仲之町の七ざんう當時へ相寄町へ引て居を  
そりと。ナレガ先列。私ひ桑番のことをち言ひ。あざる  
ナシヨ。イハ左近人。多理で稻戸の日影。ざきよゑ  
だりけ。そまぢやア友達の七ざんの如何て居る報を  
せんざく。又、自火。多事ね人。サア。黒。迷てあひ  
ト。又絶して居の多事へ。七。多事。も。お柳。お葉。ト。彼  
毛。ア。が。ね。折。ア。今。此。度。人。來。か。と。月。の。内。ア。ま  
よ。と。見。ま。る。六。一。お柳。ア。ま。「ヨヤ七ざん。下。ア。

二個の人民 トモ ベーフヤ七セブン クル クル て今時 カヨヒ は死人シムジン

六ロク イヤニヨアラム トモ お變る事ハタキル が有アリ てゐそを ハシマリ 狼オオカミ の跡シテ

恐アラシ し事モノ のサトトモ あ那ナガ の身カラ のアソクアソク あらきアラキ トモ 改ハシメル

せりやあたまアタマ がふ東ヒタチ の氣カミ 貨カツ とモ お達アハラシ づくアハラシ の御身ミコトカラ

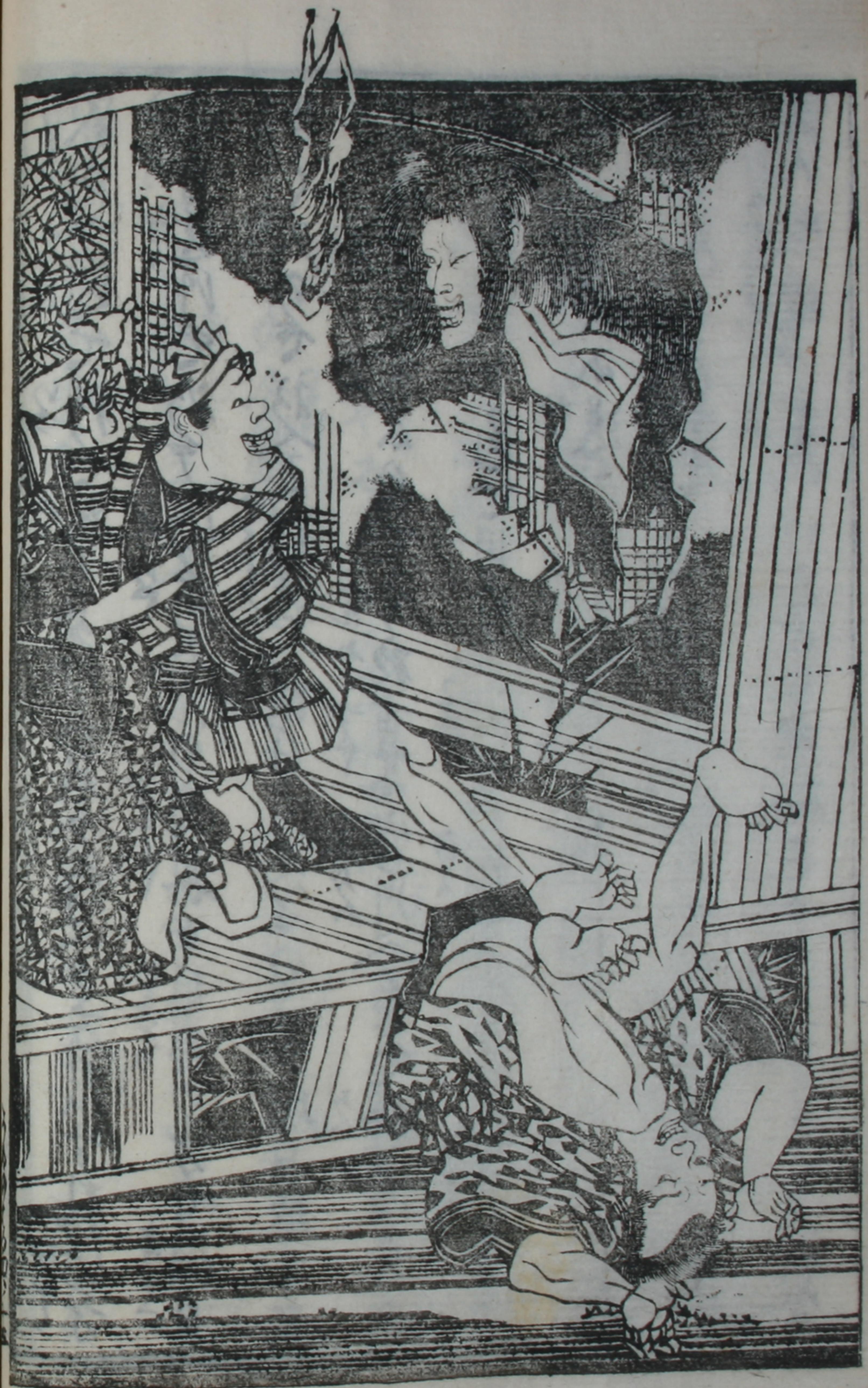
寧アラシ 一ヒナ オヤハオヤハ そよ大ヨウ きみキミ 四シ 小コトハ かきカキ トモ あ

のをまマ 一ヒナ の金箭キンケン でモ 今イマ りうちリウチ け眼メガネ の毫ヒラ へ塵チ そモ いモ そ

野アラシ ても要アリ 必マツタリ ひ入ハスル 一ヒナ 左シタ 鞍スサノ そモ そモ 又アリ 今イマ の

あうアラシ づアラシ がおま更アラシ をすまうアラシ 知アラシ せり アラシ そモ の更アラシ 七セブン の

家内へ速そりて参り候事アタハ人ク左表すれ候ひ方  
達も専門アハ事あらんの及爲が因吉の方で明日  
早々入のをねと別種領けとあるのどが明日亟と  
貴仁度と就く所て今夜直系官房へ至て歸るつゝりと  
拂て來るゝ多毛せ因吉ア波甚也用のを身分どア  
乞へ歎くはふ送りとれて參り候事アタハ七八日を過ぐ  
勢をひそむがやア行板モ彦紙とてか事あせアラ若行  
きん壁道がをひけモども床席もまゝアラキミシホモ



白泉月吉の  
細工破落戸  
山をあう



事とけよどもぞ左紙さきても異まことを成なすを爲めすと  
余の相あい及ひ御ごとまんみ達たてりの相あい候まとまして其そを  
うへるやどりをくわきさんまとまるをくわきらしにくわき金かねをくわき取くわきる  
らすくわきも早はやくくわき小舟こぶねの方ほうへ坐すわて船ふねをくわきらしてりとくわきて  
メイヤ再ながやア連つづのハナはな以よ腰こしをくわきりくわき窮きずへくわきせくわきせん  
乗のくは方ほうハ途中ちゆうじゆへ寄よすくわきすアくわきる方ほうががのがサさく  
駕かののののりりででりりををききやせせうメマテテヤヤのの窮きずににあある  
だだキキトトアア游ゆくく七しち三さん人じんひひききくく脊せき

あらがりありやねんと車内くるまのが奥座おくくわも替りござる  
て居ゐますナ まゝ二份ふたぶん紙かみと毛けとを荷くわすとおもへ  
も御ごくへども先まへんヨキキやあくあく事ことり苦勞くろう取とり  
事ことりもあらうから脊せき負おて身みよト遠とほ處ところするも難むずい  
脊せき負おて身みよト遠とほ處ところするも難むずい  
脊せき負おて身みよト遠とほ處ところするも難むずい  
脊せき負おて身みよト遠とほ處ところするも難むずい  
思おもはる人ひとと車くるまの裏うしろの窓まどを見みた  
と車くるまの裏うしろの窓まどを見みた

あん一筋人寄居すりて名を考へて大意とどきを

ナテ 因へ左様子を移ふ降車してこまきをやアさうと  
用

只今雨が止まぬと天氣もおめがわくのう日

月夜も

甚うれ

りか虎の皮良ひぬれしもう娘を連てゆやアゲズと一人

りと

御身又死候やアざまも初とむせ早左様子

等すをちく

擣「早よ」因へアシタ向の運あはうか女と男の繋がりを

あら

用「あらどゆふ事」因ヘ早くあされクト女と男の繋がり

よまち  
えき  
えき

模倣すよりあら並ぶ龜飼行者と行烈の至難人

處勢 分身、假寄主席アリス 大臣アリス 計  
事

アラアラと大喜び全アレ見事不可アリス 丁度アリス お詫

生ね生アリス ぬ死アリス 痛アリス 通アリス せ

透アリス て居アリス て明アリス てアリス 金アリス て通アリス せ

小虫アリス 痛アリス て見アリス てアリス 金アリス て通アリス せ

同本アリス 二ア被アリス て通アリス てアリス 金アリス て通アリス せ

鶴アリス ト言アリス て見アリス てアリス 金アリス て通アリス せ

糸人アリス と捕アリス てアリス 金アリス て通アリス せ

懲らしと突倒毛を思度どもゞ參院の傍ききたる洞  
輿の衆人と勤務ありて、切替りもうまくはなれぬ也。家臣  
仁宗をもじる御子、其の名は、久松と號す。  
朝市を物語近く來て、あはれむに驚き、より瞿の交歎を爲ハ  
國高麗三停より驚きの戸引明けさせり。半身が  
半身死ぬ間違あつて、あはれむに驚き、一家本多をもぢる御子ト  
仕ふハツト双方が地の口を経て、かま入。あはれむに驚き、其  
人とも町家の者、ハ赫々威風威生不羈不羈正義のれども

古今のものと麻武家をも相ひ多勢の兵がの殺ひ重ねる事  
と有りて其の外に別表である多方連成の歴史を  
考へて之が由來ぢや奉はば下に於て上に於て其の事と  
多ひの言ふ事も從つて今くもとある事より其の歴史  
なる四方 改へヨリヤ冥か見る歴の所意の如き  
其の如き も「奉公ひてまごス人の者」新編二百四  
多尼猶又曰今より位主の史人さへ加へて屢々へまうを  
歎て内くヤ身も役者を首尾よく相あらむ爲をひそむ

三百石づの船をつゝを下重きにふ思候すと俄よ

さゆくい

ヨリヨリ

あめ

ヨルヨル

聲も傍とありまをせり朝がりこそへ與小舟をもる

さゆる

まき

とを

よし

アメ

アメ

匂のやど城よりてぐるは食ふ所下たそむくま

さゆる

ひうぢと

のそ

ゆめい

アメ

アメ

ト吉氣のゆふ度盞へ羲て賜くら衣類大不直まぬ

さゆる

ひうぢと

のそ

ゆめい

アメ

アメ

替へて西服をなせられ我さう主翁よ以て平一とを

さゆる

ひうぢと

のそ

ゆめい

アメ

アメ

もき矣を食でわ烈よ夢ぐ月夜の新芽うのくさり兎

さゆる

まき

アメ

アメ

アメ

アメ

下屋敷へお仕へすとどり相あひかゞで當るき三百石が

さゆる

まき

アメ

アメ

アメ

アメ

塔の狀姿も衆まふ西下屋敷の山門を入り新ふまづ

まき

アメ

長家へ旅里仕事もまことに酒の肴より海の味殊

膳をすましと呑劍とすづ燒の鳥の勢ふ因を算す

望を異と秋の境内裏門の方の紫巻よ木の根を替

春の蔓へうのふ易とと食見合せ甚矣ひをあくらむ

○是れんに翁が公ありけり祖本實正が年來信ふ

タムトキの三國福考の神力もさる奇鷗の事

きしんと太波く思へ食する度所りをとて次第を察

えて知べ

